

内院

令和2年度 かいじあむ古文書講座 第3回

おうちで古文書講座

「世界遺産 富士山」

令和2年6月27日
山梨県立博物館

学芸員 海老沼真治

はじめに

みなさんこんにちは。学芸員の海老沼(本年度2回目)です。

(怪しい者ではありません...たまにこんな格好で仕事してます↓)

博物館は5月22日から再開しましたが、感染症拡大防止の観点から、**今年度の古文書講座は、通常の講座形式での開催は残念ながら中止となりました。**

今後状況が大きく好転すれば、復活することもあるかもしれませんが、当面は前2回と同様に「おうちで古文書講座」とさせていただくこととなります。



このような決定をせざるを得なかったことは、大変申し訳なく思っております。しかし、古文書は少しずつでも継続して読むことが大切ですので、「おうちで古文書講座」が古文書を学ぶ習慣を身につけるための一助となれば幸いです。

さて、今回は富士山に関する古文書を読んできたいと思います。



(富士三十六景 甲州三坂水面)

世界文化遺産に登録されて7年になる富士山ですが、この夏はコロナの影響で、すべての登山道が閉鎖されることとなり、今年には「富士山に登れない年」という、異例の事態となってしまいました。

しかし、たとえ登れなくても、私たちにとって特別な山であることに変わりはありません。

今回は、江戸時代の富士山に関する古文書などを読みながら、あらためて、富士山と人々の関わりについても考えていただければと思います。

※途中、筆記をしていただくところがありますので、筆記具と紙・ノート類をご用意ください。

1. 前回(4月)のおさらい

古文書を読む前に、4月の講座でご説明した勉強方法を、いま一度ご紹介します。

- ①(まず) “活字” を読んでみる
- ② “活字” と古文書を見比べてみる
- ③ “かな” 文字をおぼえる

このうち、①と②については、4月講座で実際に古文書を読みながらご説明しましたので、今回は③について古文書を読みながら学んでいきたいと思えます。

まずは③について前回ご説明したことを、再度あげておきます。

【③ “かな、文字をおぼえる】

「かな」の崩し字をおぼえることも重要です。「かな」は漢字が崩れてできた字ですので、例えば「あ」なら、元となった「安」という漢字の崩し方をおぼえることにもつながります。

また、当時は「かな」に1つの漢字だけでなく、複数の漢字が使われていました。

「は」であれば、現在は「波」をもとにした字だけですが、「者」「盤」「葉」などの字も用いられました(次のページに例をあげています)。

つまり、ひとつの「かな」を学ぶことで、複数の漢字の崩し方をおぼえることができるのです。

かな「は」の字例

「波」

「者」

「盤」

「葉」

は
は
は
は
は
は
は
は

者
者
者
者
者
者
者
者

盤
盤
盤
盤
盤
盤
盤
盤

葉
葉
葉
葉
葉
葉
葉
葉

「かな」を学ぶことで、多くの漢字を学ぶことにつながるということがお分かりいただけるとと思います。

では、「かな」で記された古文書(資料)というと、どのようなものがあるでしょうか？

例えば...

- ・「古今和歌集」などの和歌集
- ・「源氏物語」「土佐日記」などの古典文学
- ・絵巻物の詞書
- ・仮名消息(「かな」で書かれた手紙)

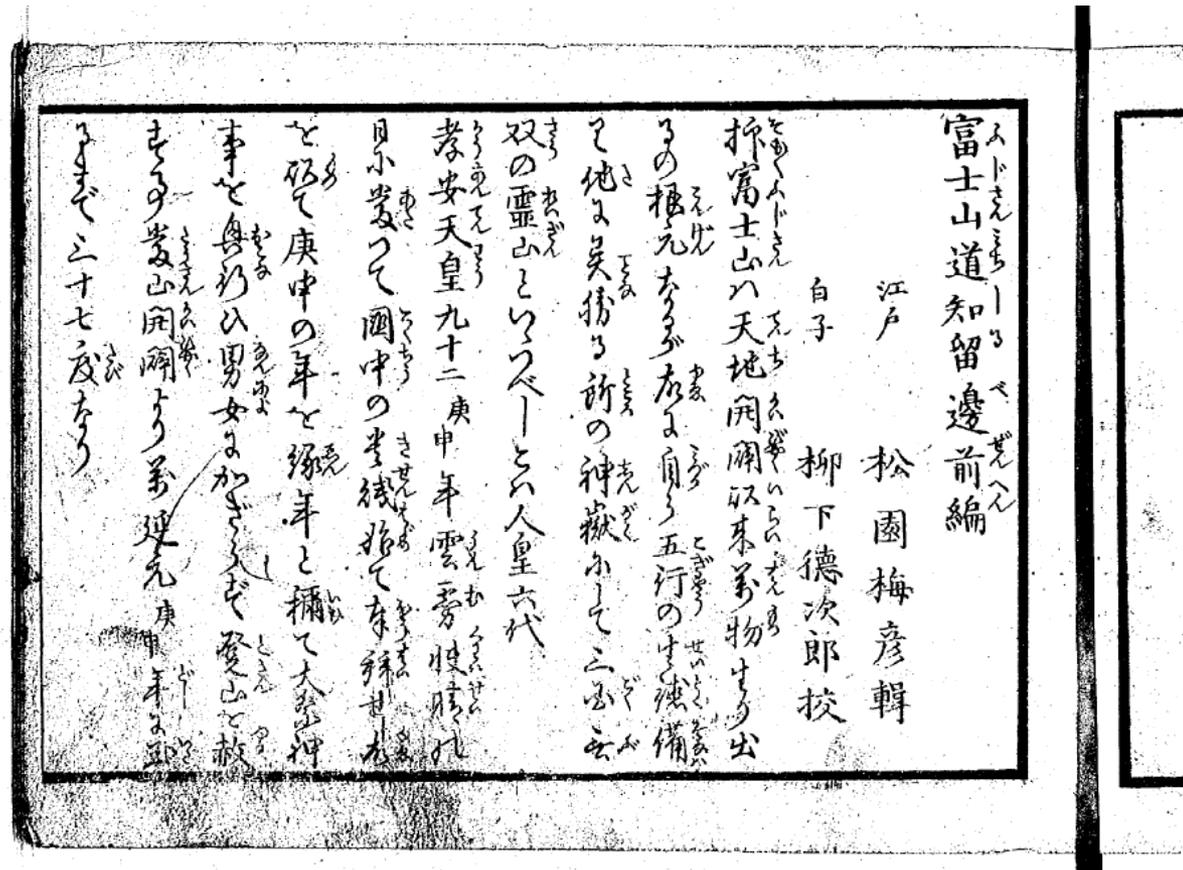
などがあげられますが、取り組みやすさという点からは、**「江戸時代の版本」**は、庶民向けの比較的読みやすいものが多く、良い教材になると思います。

2. 江戸時代の版本を読む①

ということで、まずは富士山に関する版本を読んでみましょう。
最初は『富士山道知るべ』です。万延元年(1860)に出版された、
江戸から北口(富士吉田市)ルートで富士登山をするためのガ
イドブックです。

右の写真は本文冒
頭部で、最初の行が
タイトルになります。

...おや?と思ったか
たがいるかもしれま
せん。



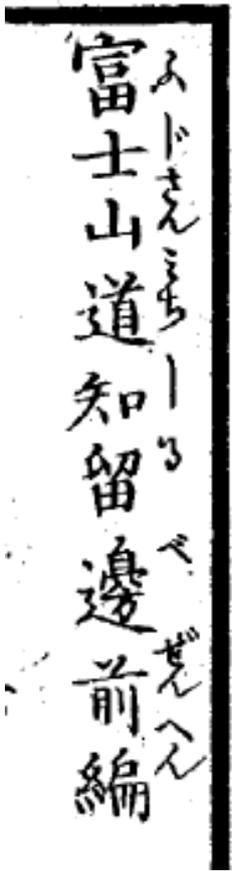
私は書名の紹介で『富士山道知るべ』としましたが、写真にある書名は『富士山道知留邊』ではないか、と。

確かに、書名は『富士山道知留邊』とあり、「ふじさんミちしるべ」と振り仮名があります。ですので、すべて漢字で表記しても問題ないでしょう。

ただし、「知留邊」という漢字三文字の言葉は存在しないので、本来は「知るべ」または「しるべ」と読むべきものと判断できます。

つまり、「留」と「邊」はそれぞれかな「る」と「へ」に当たる字であり、見た目は漢字ですが、ここではかなとして読んでおきました。

※「知」はかなとして読むなら「ち」になるので、ここでは漢字の訓読みと判断しました。



富士山道知留邊前編

①

【課題1】

本文の一部を読んで、翻刻文を作ってみましょう。

※参考として、最初の2行の読みを左に示します。

※慣れていない方は、本文の大きな字だけでも構いません。

※ある程度読める方は、ふりがなも含めて読んでみましょう。

かみよしだむら

上吉田村

このち

此地ハ御師の家八十六軒

おし

いゑ

けん

たちなら

櫛比びていと繁庶り

にきへ

又大湖を隔て川口村にも御師多く住めり

上吉田村

此地ハ御師の家八十六軒

又大湖を隔て川口村にも御師多く住めり

櫛比びていと繁庶り

又大湖を隔て川口村にも御師多く住めり

又大湖を隔て川口村にも御師多く住めり

登山の人々先達村ある御師の家八十六軒

又大湖を隔て川口村にも御師多く住めり

又大湖を隔て川口村にも御師多く住めり

あり山後浅を出入り

又大湖を隔て川口村にも御師多く住めり

又大湖を隔て川口村にも御師多く住めり

土家とそとの

※次ページに続きます。

不淨後ふじやうごの料りやう

二十二文

二合目後ふあめご以もつ者もの賽銭さいせん

十二文

令剛えんがう杖じやう之の料りやう

八文

又また合目あひめ

二十二文

九合目ぐあひめ為な尾お四よ橋はし

十文

頃上ころかみ葉は所ところ之の嶽たけ

二十文

右總計みぎのうぢけい百二十二文ひゃくにじふにぶん是こゝとこゝ山やま後ご後ご之の料りやう

て古昔ふるむかしへ山やま上かみ去さるる其その場ばとと玉たまつて

出いせせが今いまのの一ひと度たびは山やま所ところへ後ご一ひと度たび

山やま上かみおおてて六む切き子こと後ご去さるるのの料りやう

人ひとのの惣そうをを昔むかしくく為なるる又また川かわ口ぐち村むら

の山やま所ところへ頼たのむむのの者ものも此こゝ山やま後ご後ご之の料りやう

吉田村きちだむらなる山やま所ところへ後ご去さるる

判読例は以下ようになります。

①

かみよしだむら

このち

おし

いゑ

けん

上吉田村

此地ハ御師の家八十六軒

たちなら

にきハへ

櫛比びていと繁庶り

又大湖を隔て川口村にも御師多く住めり

とさん

まづたうむら

おし

登山の人々先当村なる御師の家に

いた

やまやくせん

いだ

ミをきよ

やまいり

至り山役銭を出し、潔斎め山行の

よそほひ

装をととのふ

②

ふしやうはらへれう

不浄祓の料

三十二文

がふめゑんきやうしやさいせん

二合目役行者賽銭

十一一文

(次ページに続く)

②つづき

こんがうつえ れう

金剛杖之料

がふめ

八文

五合目

がふめとりみミはし

三十二文

九合目鳥居御橋

てうじやうやくしがたけ

十四文

頂上薬師ヶ嶽

これ やまやくせん

二十文

右総計百二十二文、是を山役銭といひ

むかし さんしやう そのはく

て古昔ハ山上なる其場々に至つて

いだ いま ど おし わた お

出せしが、今ハ一度に御師へ渡し置き

さんしやう きつて わた これ けい

山上にてハ切手を渡すのミ、是は詣

わつらい はぶ ため またかはぐちむら

人の煩を省く為なるべし、又川口村

たの もの このやまやくせん

の御師へ頼ミのある者も、此山役銭ハ

よしたむら

吉田村なる御師へ渡す事とす

いかがでしたでしょうか？

ふりがなは小さく書かれているので、あまり古文書に慣れていない方は難しかったかもしれません。

本文は、あまり崩していない字が多く、かなも今の字に近いものが多く使われていたので、読める文字もそこそこあった！と感じていただければ何よりです。

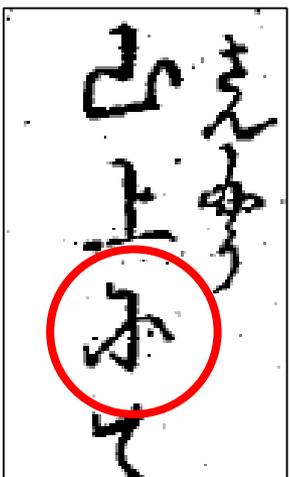
かなについては、いくつか見慣れない形の字があったと思いますが、その多くは、現在使われているかなとは、元になった漢字（「字母」と言います）が違うものです。

こうしたかな（変体かな）については、先に述べたとおり、「かな」として覚えるだけでなく、漢字としても覚えておくことが重要です。

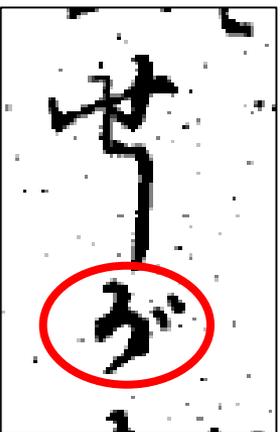
いくつかの事例を次ページ以降に示しておきます。



↑これは、かな「り」
で、字母は「里」です。



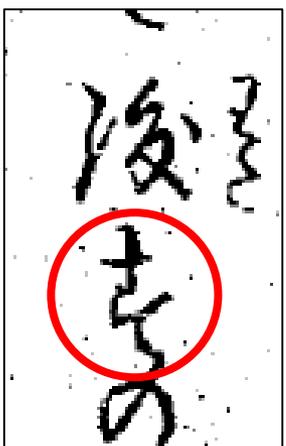
→ 上下どちらもかな「に」、字母は「尔」です。
かな「に」として頻繁に使われます。



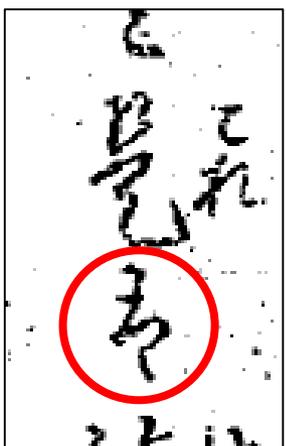
↑かな「か」に濁点がついたもの。字母は「可」。崩し方は5月の講座で紹介しました。かなとして頻出します。



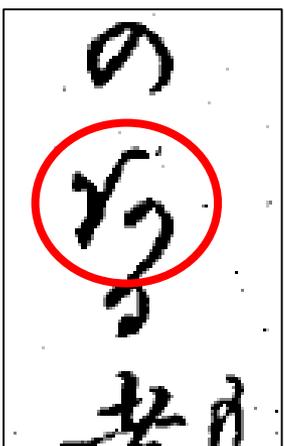
↑かな「き」で、字母は「起」
です。



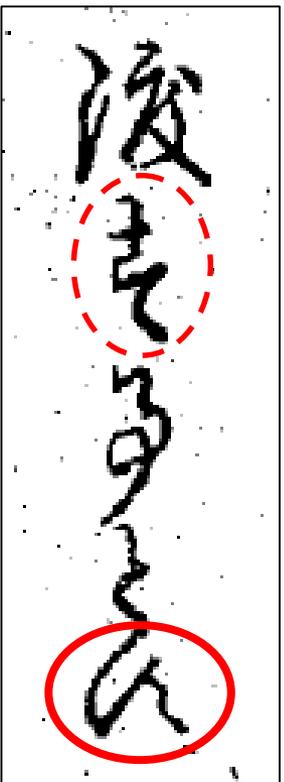
↑ かな「す」で、字母は「春」。
これもよく使われます。



↑ かな「は」で、字母は「盤」。
5月にご説明した「者」に
次いでよく使われます。



↑ かな「あ」で、字母は「阿」。
つくりは前ページで「説明し
た「可」とほぼ同じ形です。



↑ かな「す」で、
字母は「須」。
これはかなり崩
された形です。

※その3字上にも「す」があります。
→
字母はわかりますか？

- くずし字の辞典をお持ちの方は、ぜひ上記の字の用例を引いてみてください(かな、漢字双方の用例を見てみると良いでしょう)。
- また漢字でも、「**至**」「**銭(のかねへん)**」「**鳥**」「**置**」などは、くずしの典型例のような形です。またこの4字は、他に部首を加えたり、除いたりすることで、別の字にもなりますので、様々な字を覚える(+辞典をひく手掛かりになる)ことにつながります。

この文書は漢文の要素がなく、そのまま上から下に読めますので、最後に現代語訳例をあげておきます。

【現代語訳（例）】

上吉田村 この地は富士山御師の家が八十六軒も並んでおり、とても賑わっている（また湖を隔てた川口（河口）村にも御師が多く住んでいる）。

富士山に登る人は、まず当村の御師の家に入って山役銭を支払い、精進潔斎して登山の準備をする。

（山役銭の内訳省略）

右の合計百二十二文を山役銭といい、かつては山上のそれぞれの場所で支払っていたが、今は全額を御師に支払い、山上では切手を渡すだけである。これは、登山者の（途中で何度も支払う）面倒を無くすためである。

また川口村の御師に世話をしてもらう道者も、この山役銭は吉田村の御師へ支払うことになっている。

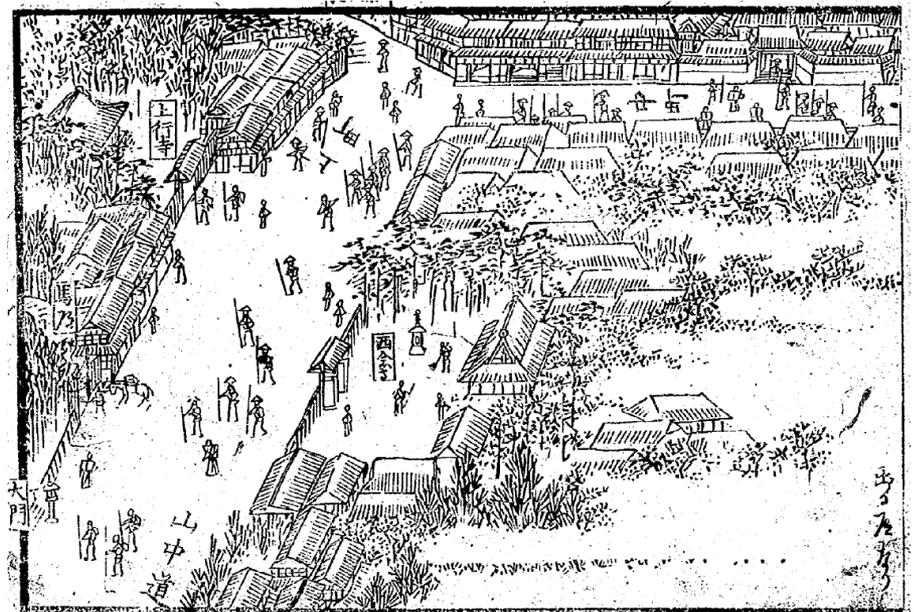
富士参詣登山の拠点としての上吉田村と、参詣者を迎える御師の活動、登山に必要な費用(山役銭)について、簡潔に記されていることがわかります。

山役銭は、参詣者が必ず支払うものという点では、現代の「入山料」ということができるでしょう。江戸時代には、122文が基本だったようですが、時期によって支払い方法に変化があったようです。

現在の富士山でも、登山時に「富士山保全協力金」のお願いをしていますね。

⇒

『富士山道知るべ』に見える、上吉田の町



3. 江戸時代の版本を読む②

次に読んでみたいのは、『**富士山百景狂歌集**』です。

序文によると、江戸麴町山王辺に住む「大寝坊不朽山人(おおねぼうふきゅうさんじん?)」なる人物が、寝言で口遊んだ、富士山に関する100首の狂歌、という設定になっています。

狂歌とは、和歌と同じ5・7・5・7・7の音で、風刺や滑稽を織り交ぜて詠まれた歌です。思わず笑ってしまう内容や、なるほど、座布団1枚！と言いたくなる内容もたくさんあるので、親しみやすいのではないかと思います。

まずは参考に、第1首目を読んでみます。

富士山ハ

世界のかい

はしら

これ

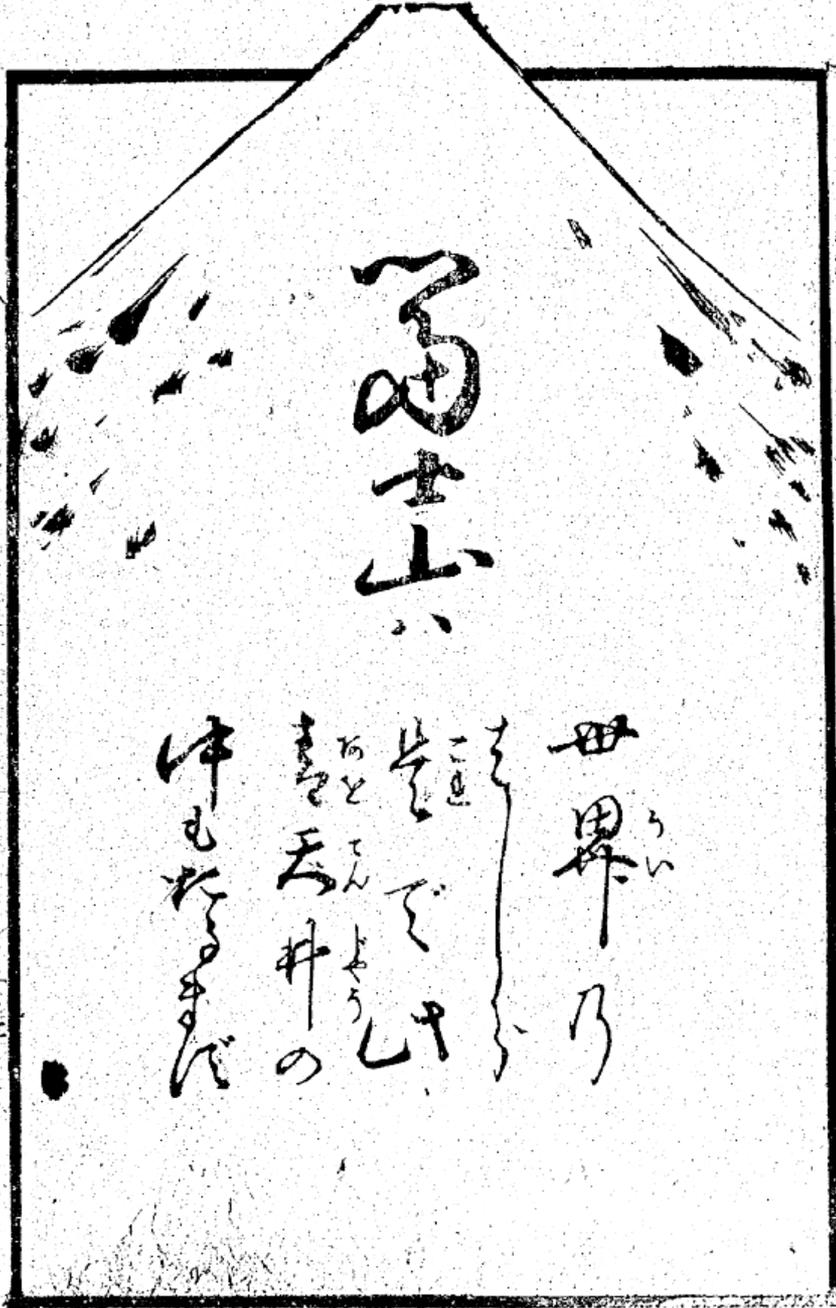
是で此

あおてんしやう

青天井の

中もたるまづ

(富士山は世界の柱であり、このおかげで青天井(青空)も中たるみせず美しく見えるものだ)



この歌は、かなについては現在と同じ字か、前の文書で出てきた字がほとんどです。

漢字も、わかりやすいものが多かったのではないかと思います
が、「富」「此」「青」あたりは、典型的な崩し方になっていますので、覚えておくと良いでしょう。

なお、文字の配置は、単純に上から下、右から左ではなく、挿絵に合わせて柔軟に配置されていますので、和歌として成立するように読む必要があります。

【課題2】

次ページ以降の狂歌4首を読んで、翻刻文を作ってみましょう。

※慣れていない方は、本文の大きな字だけでも構いません。

※ある程度読める方は、ふりがなも含めて読んでみましょう。

①

山と水と
ほりあいで

地しんで

肩の婦が

出来下

是が傳まこと

ふじの災あはれ種



②



婦しり

その中なかに

何れは

十三ヶ園じゅうさんかえん

又と下した



③

婦し山は

富士山

うすもの
らるるも
忠要捨て
東よりと
ちやんと
心てけさる

④

古
婦

心

た
り
石
二

こころはなほあはれ
らんをたりの入として仕奉る



翻刻例は以下のとおりです。

※文字の配置も資料に合わせています。

②

ふじさんが
くも なか
雲の中
あたま
から
出だし
十三ヶ国
見廻ミま
して居るゐ

(富士山が 雲の中から 頭出し
十三ヶ国 見廻して居る)

①

ほうえいど
宝永度
ち
地しんで
かた
肩にこぶが
でき
出来
これ まこと
是が誠に
さいなん
ふじの災難

(宝永度 地震で肩に こぶが出来
是が誠に 富士の災難)

③

は 山 じ ふ

かすみの

ころも

すて

ぬぎ捨て

ひがし

東しらミを

ちやんと

ミい

見て居る

(富士山は 霞の衣 脱ぎ捨てて
東白みを ちゃんと見て居る)

④

お
ふし
さん

見れハきものもなかりけり

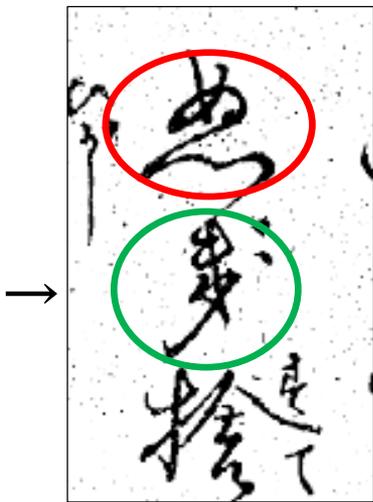
しまふ

みんな左りに入れて仕舞ふた

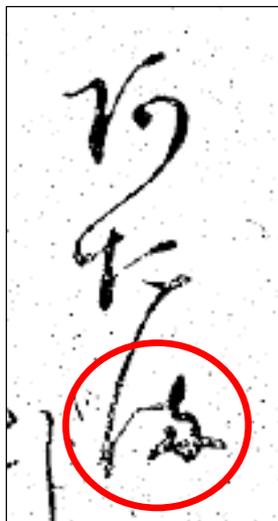
(お富士さん 見れば着物も 無かりけり
みんな左に 入れて仕舞うた)

《新たに出てきた変体がな》

下の○は「き」に濁点、字母は「幾」です。見慣れない字のようですが、現在の「き」と同じ字で、崩しの程度が異なります。

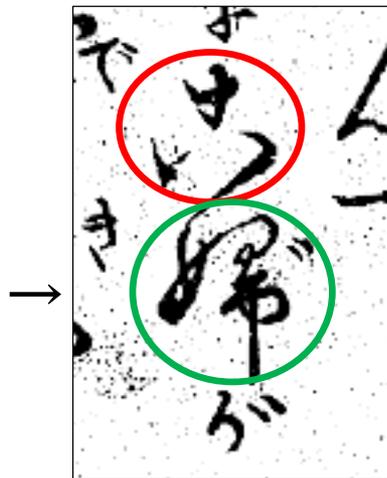


↑上の○は「ぬ」の下に何かあるように見えますが、字母を「怒」とするかな「ぬ」です。

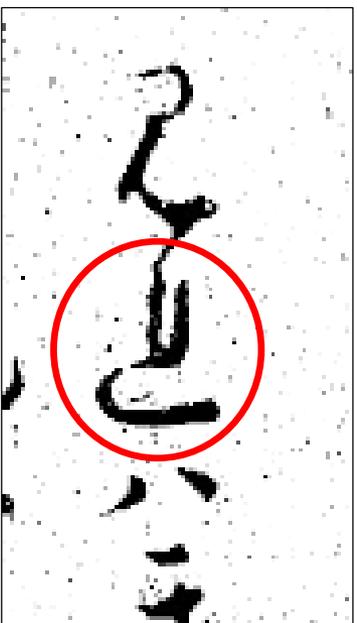


↑かな「ま」、字母は「満」です。一番上の字は、先ほど出てきましたね。

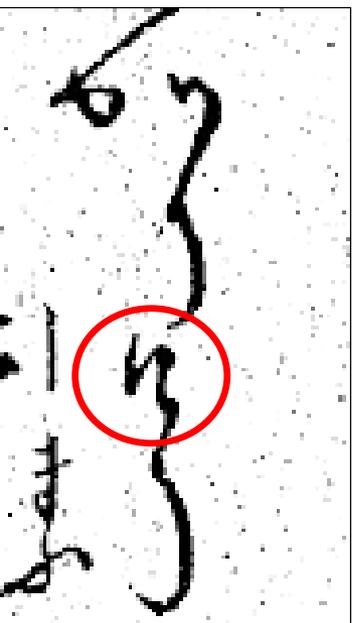
下の○は「ふ」に濁点、字母は「婦」です。漢字のようにも見えますが、これもかなです。①〜④すべてに使われています。



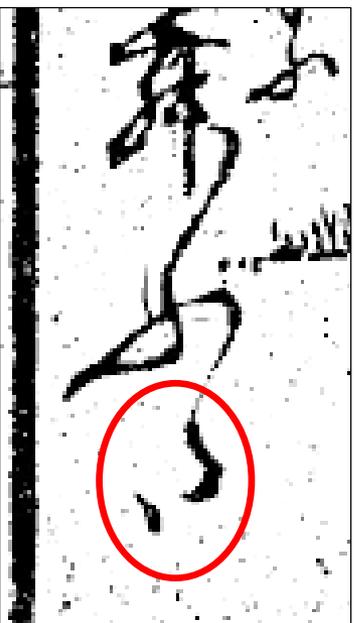
↑変体がなが2つ続いていきます。上の○はかな「こ」、字母は「古」。よく使われる字です。



↑ かな「れ」、字母は「連」です。小さくて見づらいですが、よく使われるかなです。



↑ さらに小さいですが、かな「け」、字母は「介」です。これもよく使われます。



かな「た」、字母は「多」です。現在の「た」より頻繁に使われているんじゃないか、と思えるほどよく出てきますので、ぜひ覚えておきましょう。

100首の中には他愛ない内容の歌もありますが、今回取り上げた4首の歌については、

- ①は宝永噴火でできた「宝永山」に言及しています。
- ②の「十三ヶ国見廻して」とは、当時富士山を眺望できるとされた国の数と一致します。
- ③は夜明けとともに霞が晴れて美しい山体を表す、「凱風快晴」のような風景を詠んでいるのでしょうか。
- ④東海道では珍しい「左富士」の眺望ポイントに言及しています。

といったように、富士山と周辺の名所や眺め、知識等が盛り込まれていることがわかります。

4. 古文書(地名・人名)を読んでみましょう

最後に古文書原本の写真を見て、どんな文字が書いてあるかを判読してみましょう。

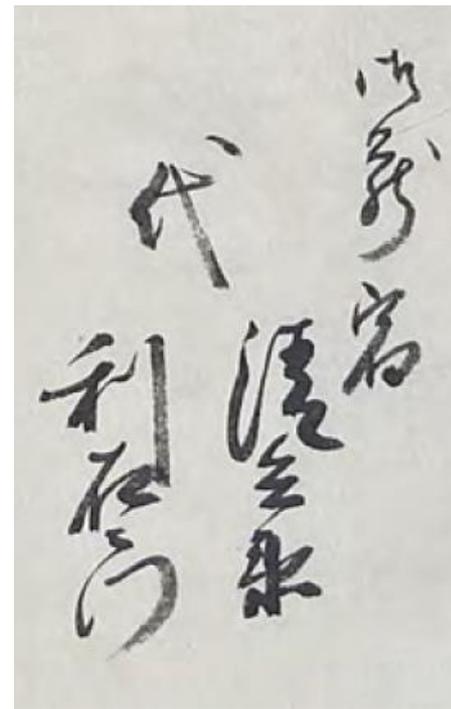
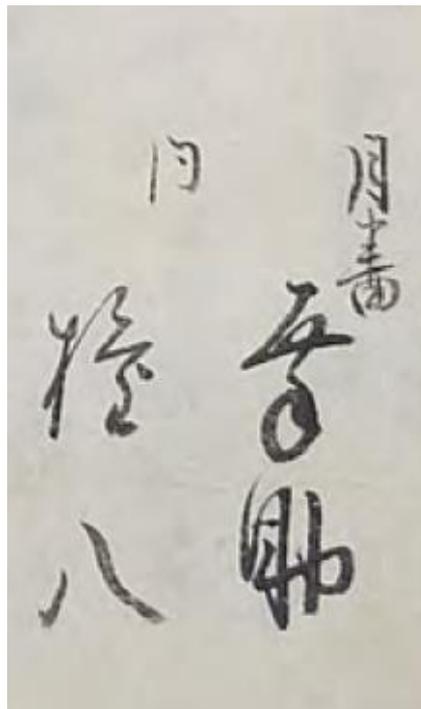
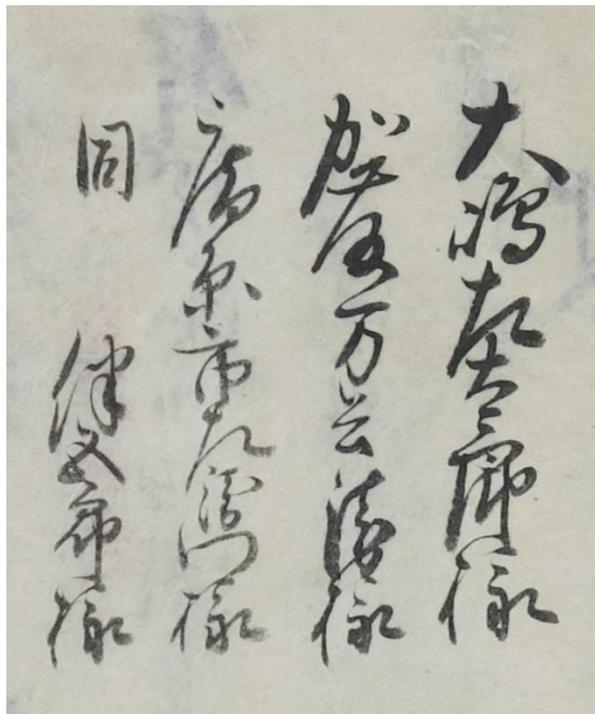
ただし、今回は古文書の全文ではなく、地名・人名が列記された部分を読んでみたいと思います。

その理由は、①地名であれば現在も使われているものが多いので文字を推測しやすい。②人名は数種類のパターンを覚えてしまえば、最初の1,2字を読むだけで大体理解できる。ということにあります。

本文が長文の古文書に比べれば、わからない字は比較的少なくなり、挫折することも少なくなるのではないかと思います。

私も学生時代に、先輩の勧めでそんなことをしていた記憶があります。

江戸時代の庶民の名前の一例



御蔵宿

清兵衛

代

利右衛門

月番

幸助

同

権八

同町

七郎兵衛

※この4人は武士です。

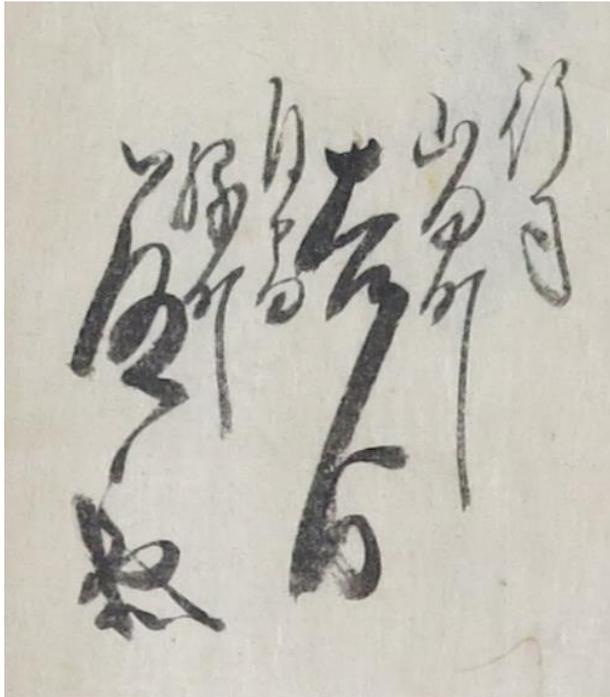
大嶋左太郎様

加藤万兵衛様

庵原市左衛門様

同伴五郎様

《この2人はちょっと難しいです》



行司

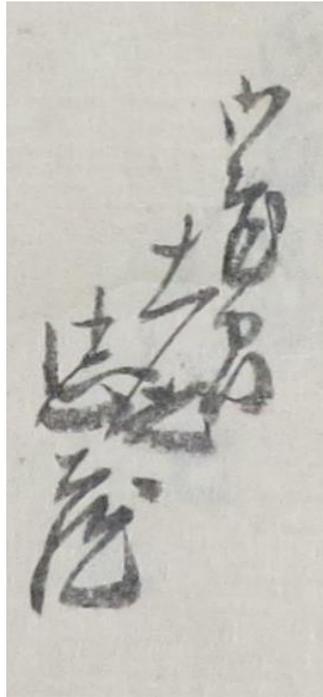
山田町

吉右衛門

月番

緑町

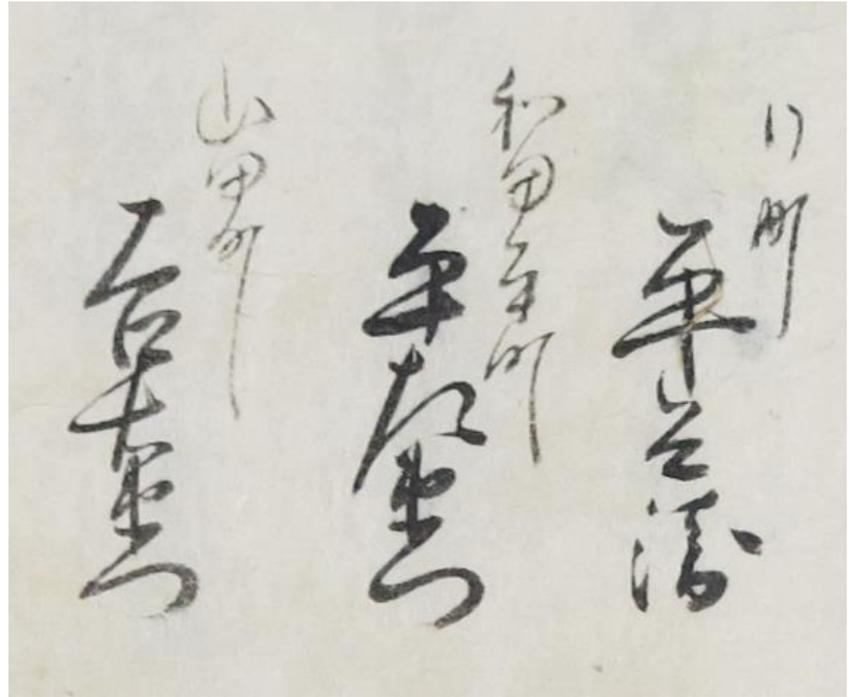
藤兵衛



御蔵宿

十一屋

忠蔵



山田町

吉右衛門

和田平町

平左衛門

同町

平兵衛

ご覧いただいたように、男性の人名は、

- 「●右衛門／●左衛門」
- 「●兵衛」
- 「●太郎／●次郎／●三郎...」
- 「●助／●介」
- 「●蔵」「●吉」

といった形にパターン化されたものが多いので、パターンとなる字の崩しを覚えておけば、あとは「●」部分が読めればOK、ということになります。

「●」部分も、人名として不自然でない字が入りますので、ある程度絞り込んで調べることができます。

では、最後に「**富士登山人改帳**」という古文書の一部を読んでみましょう。

この古文書は、その名の通り富士登山に訪れた人々の住所、行先、組名、御師名が列記されており、甲州だけでなく、様々な地域から多くの人が登山に訪れていたことがわかります。

【課題3】

次ページ以降にある古文書の写真を読み、翻刻文を作ってみましょう。

※最初の一筆の翻刻を示しておきますので、それを参考に翻刻文を作ってみましょう。

※この課題の翻刻例は、7月1日に別途HPに掲載しますので、じっくり考えてみてください。

☆翻刻文を作ってみましょう☆

【筆めの翻刻例】

七月十日

一、武州那賀郡木部村

胎内行

(印)

喜左衛門組 式人

川口御師

本庄監物附

①

七月十日

一、武州那賀郡木部村

川口御師

本庄監物附

胎内行

喜左衛門組



人

川口御師

一、武州那賀郡木部村

高橋和泉附

胎内行

喜左衛門組



人

七月十日

一、武州那賀郡木部村

川口御師

上田右山附

胎内行

喜左衛門組



人

※次ページに続く

七月十日

一尾册 名古卷 力筋三丁目

菅田行
元五郎

川口
改會所附

一尾册 鳴笛 丸丁目

菅田行
徳次郎

菅田行師
里邊和泉附

一上册 形馬 名相新村

菅田行
徳次郎

日吉師
中層丸由美附

七月廿五日

一上册 仙卷 中村

菅田行
元五郎

川口
改會所附

一上册 吾妻形 上原波村

菅田行
徳次郎

川口師

十石原玄壽附

人殺 惣七百長人

※【課題3】の翻刻正解例については、7月1日(水曜)にHPにアップしますので、ご確認ください。

おわりに

本日の「おうちで古文書講座」は以上です。

古文書(くずし字)というものは、読めないとどうしても挫折してしまいがちです。ですので、最初のうちは無理せず、読めそうなものから始めて、コツコツと、少しずつ読む文書のレベルを上げていきましょう。

今まで読めなかった字が、ある日読めるようになると、けっこううれしいものです。「読める喜び」をたくさん味わえるよう、頑張って学習を続けていただければと思います。

博物館の常設展では、「**富士は日本一の山**」をテーマとした資料を紹介しています。

また夏の企画展は中止となりましたが、常設展の拡大展示「かいじあむ十(プラス)」と題して、普段あまりご紹介できない資料を展示しています。

古文書も色々展示していますので、ぜひ「古文書を読みに」いらしてください。

※ただし、時節柄長時間の滞在はおススメできません...

今回も最後までお付き合いいただき、ありがとうございました!!

